

年少者の言語能力と学力に関する研究

－日本語力と話者意識および生活習慣の関係について－

宮田好恵* 松井洋子** 早野慎吾***

1. はじめに

近年、JSL (Japanese as a Second Language)、および FJB (Foreigners of Japanese Birth) 年少者が急激に増加している。JSL とは日本語を第二言語として学ぶ話者で、FJB とは、日本で生まれ育っているが、親が非日本語話者(片親が日本語話者のケースを含む)で、言語形成期の初期から日本語以外の言語とも接触してきた話者のことである(早野・松井他 2008b)。

これまで筆者らの研究グループ¹は、宮崎県および栃木県をフィールドに JSL・FJB 年少者に対する実態調査を行ってきた(井上・早野(2006)、松井・早野(2006, 2007a, 2007b)、佐藤・早野(2007))。さらに早野・松井他(2008a)、早野・松井他(2008b)、早野・田中他(2009)、早野・松井・宮田(2010)では、JSL・FJB 年少者および日本人児童の言語能力に関する研究報告を行ってきた。日本人児童を調査対象に加えたのは、外国人児童生徒と比較するためである。外国人年少者の言語習得状況の実態把握をするためには、比較対象として日本人児童において言語習得がどのような状況にあるのか、詳細な実態を知る必要がある。

今回、日本語能力調査を行った宮崎県の某小学校(日本人児童対象)で、学力試験および生活習慣・学習態度に関するアンケート調査を実施した。日本語能力と学力の関係に関しては既に早野・宮田(2011)で論じた。本稿では生活習慣・学習態度と日本語能力および学力の関係を中心に分析する。

2. 調査概要

対象は宮崎県の某小学校の日本人児童(日本語母語話者)28名(男子12名、女子16名)である²。学年は5年生で、調査項目『新編新しい社会5下』(東京書籍平成18年度版) pp.30-47 に使用されている語彙である。調査は、話者自身が「わかる」「わからない」を判定する話者判定調査と、児童にことばの意味を説明してもらい、どの程度理解できているかを調査者が判定する理解度調査の2種類を行った。話者判定調査は215語(項目)、理解度調査は41語(項目)である³。調査期間は平成23年1～2月で、調査時において児童たちは、調査項目に関して学習していない。

比較する JSL・FJB 児童生徒および日本人児童は、早野・松井・宮田(2010)で報告した栃木県真岡市在住の話者である。栃木県の話者を日本人(栃木)とし、今回調査した宮崎県の

*東大和市立第十小学校 **東京福祉大学 ***都留文科大学

児童を日本人(宮崎)と表現する。学力に関しては「みやざき小学校学力調査(小学校第5年生)」(以降、県テストと表現する)を用いる⁴。

3. 語彙力に関する調査から

3.1. 話者判定調査 (不理解語彙率 215 語)

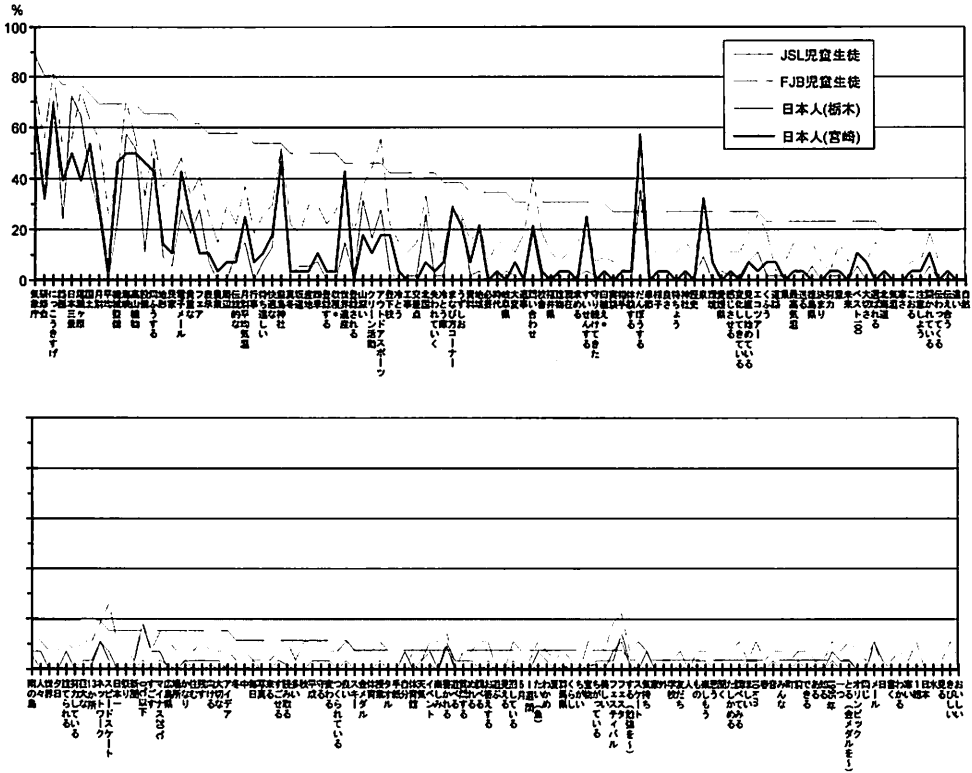


図1 不理解率(215語)

早野・宮田(2011)

教科書語彙の理解度について概説しておく。図1は、早野・宮田(2011)によるもので、215語を使用した話者判定調査で「わからない」と回答した百分率(不理解語率)である。語彙はJSLにとって難易度が高い順に配列してある。日本人(宮崎)、日本人(栃木)は不理解率のパターンが近い。語彙習得過程が近いためと考えられる。不理解語彙の平均は日本人(栃木)12.28、日本人(宮崎)16.32、FJB33.07、JSL50.08となっており、同じ地域(栃木県真岡市)で生育した日本人(栃木)とFJBの違いの方が、日本人(栃木)と日本人(宮崎)の違いよりも大きい。日本での地域的な要素よりも、親が日本語話者か否かが日本語習得に大きな影響を与えていることがわかる。理論的な説明値⁵は日本人(栃木)1.30、日本人(宮崎)1.06、

FJB0.93、JSL0.45 となっており、日本人(栃木)より FJB に近い(早野・宮田 2011)。今回対象とする日本人(宮崎)は、そのような日本語力の話者である。

4. 話者意識と生活

県テストでは「学習や生活についてのアンケート」が実施されている。このアンケートには、授業の好き嫌い、授業のわかりやすさなどの学校の授業内容に関するものから、自宅での学習時間、学習塾への従事、個人の学習形態の好みや読書時間、家庭での生活の様子(朝食を取る、決まった時間に寝る、家の手伝いをするなど)、チャレンジ精神やきまりを守るなど個人的な性格を問う内容も含まれている。

各質問項目は、よくする(1)、まあまあする(2)、あまりしない(3)、まったくしない(4)の4件法となっている。これらのアンケート結果と説明値、県テスト⁶の相関関係をみてみる。調査項目の値をそのまま使用し、数値はピアソンの積率相関係数である。「よくする」が1で、「まったくしない」が4なので、値が正ならば否定の関係、負ならば肯定の関係になる。従って、相関係数を算出した場合、マイナス値が高くなるほど正の相関が高い。なお、*は $p<.05$ **は $p<.01$ で統計的に有意であることを意味する。

4.1. 学習に関すること

4.1.1. 学校や家で勉強してわからないことがあるとき、どうしていますか

回答は次の6項目である。①自分一人でやってみる。②友達に聞く。③家の人に聞く。④学校の先生に聞く。⑤学習じゅく(塾)や家庭教し(教師)の先生に聞く。⑥そのままにしておく。

この項目と説明値の相関は認められない。相関係数の高い項目で⑤が.208、⑥が.218であるが、有意差は認められない。

この項目と県テストでは、⑥でかなりの相関が認められる(相関係数は.590**)。値が正なので、「そのままにしておく」ことを「しない」児童の学力が高いということである。わからないことを「そのままにしておく」ことが学力低下につながっていることがわかる。

4.1.2. 次のことはあなたにどのくらいあてはまりますか

回答は次の3項目である。①とき方(解き方)が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法で考える。②新しく習った漢字をふだんの生活の中で使おうとしている。③遊んでいるときや買い物に行ったときなど、ふだんの生活の中で計算をする必要があるときは、暗算をすることがある。

この項目と説明値の相関も認められない。相関係数の高い項目で②が-.267であるが、有意差は認められない。

この項目と県テストでは①と③に相関が認められる。①が-.458*、③が-.391*である。諦めずに対処することは日本語力とはほとんど関係ないが、学力とはかなりの相関が認め

られる。①と③は真面目さや地道な努力に関する項目と思われる。4.1.1で分析したように、わからないものを放置せずに対処する真面目さが学力向上に最重要であることがわかる。

4.2. 生活に関すること

4.2.1. 一ヶ月に、何さつ（冊）くらい本を読みますか

回答は4件法で次の通りである。①7さつ以上。②4さつ～5さつ。③1さつ～3さつ。④読まない。

この項目と説明値の相関係数は-.568**でかなりの相関が認められる。読書量が多いほど説明値が高くなることがわかる。この項目では、どのような種類の書籍かは聞いていない。小説、ライトノベル、論説等で相違が見られるかは次回の課題である。

この項目と県テストの相関係数は-.529**で、やはりかなりの相関が認められる。この項目は日本語力、学力共にかなりの相関が認められる。本調査においても読書量が日本語力および学力と直結していることが確認できる。小学生の段階で読書習慣を身に着けることが、その後の学力向上に大切なことと考えられる。

4.2.2. 学校以外で、どのようなことをしてすごしますか

回答は次の11項目である。①外で遊ぶ。②テレビを見たり、マンガをよんだりする。③テレビゲームやパソコンなどをする。④本や新聞をよむ。⑤勉強をする。⑥そろばん、習字、ピアノなどのおけいごとをする。⑦スポーツクラブやスポーツ少年団などの活動をする。⑧公民館や地いきの活動にさんかする。⑨美術館、図書館、博物館などに行く。⑩家の手伝いをする。⑪家族とすごしたり、出かけたりする。

この項目で、説明値との相関係数が高いのは③-.306、④-.249、⑨-.245であるが、有意差は認められない。低い相関がある③④は、文章を読む項目である。文字言語との接触が日本語力に影響したものと思われる。

この項目で、県テストとの相関が認められたものはない。学校以外でどのように過ごすかは、日本語力や学力とはほとんど関係ない。

4.2.3. 家での生活について聞きます

質問項目は次の8項目である。①毎朝、自分で起きる。②朝ご飯を毎日食べる。③学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめている。④身の回りのことは、できるだけ自分でしている。⑤勉強する時間を自分で決めて実行している。⑥夜、決まった時間にねる。⑦家族でいろいろな話をする。⑧テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家の人と決めている。

この項目で、説明値と相関係数が高いのは②-.309、③-.329、⑥-.308であるが、やはり有意差は認められない。これらは生活習慣に関する項目である。相関係数は高くないが、

規則正しい生活習慣を身に付けている児童は説明値が高い傾向にあることがわかる。

県テストとの相関もほとんど認められず、最も高い②が-.272である。②は低いながらも日本語力と学力で低い相関がある。朝食を取ることの何が結びついているのかは、次の章で述べるが、これは、栄養学的な問題でなく、生活習慣の規則性が反映したのではないかと考えられる。

4.2.4. 自分のことについて聞きます

質問項目は次の12項目である。①ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある。②むずかしいことでも、失敗をしないでちょうせん（挑戦）している。③自分には、よいところがあると思う。④しょう来（将来）の夢や目標をもっている。⑤世の中のいろいろなできごとに関心がある。⑥学校のきまりを守っている。⑦友だちとの約束を守っている。⑧人がこまっているときは、進んで助けている。⑨近所の人に会ったときは、あいさつをしている。⑩人の気持ちがわかる人間になりたいと思う。⑪いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。⑫人の役に立つ人間になりたいと思う。

この項目で、説明値との相関係数が高いのは④の.435*である。つまり、将来の夢や目標を持っている児童ほど説明値が低いことがわかる。普通に考えると目標がある人ほど説明値が高くなりそうであるが、実際はそうならない。この項目は自分の現状をどれだけ認識しているかを確認したものと考えられる。つまり④は、実際に夢や目標を持っているか否かではなく、自分の現状を捉えられているか否かの質問項目であり、現状を捉えられていない児童ほど説明値が低いことになる。夢を語るよりも、日先の課題を確実に解決していくことが学力向上には重要なのであろう。

④は県テストとの相関も.301であり、有意差はないが低い相関があり、夢や目標を持っている（現状を認識していない）話者ほど学力が低い傾向がある。県テストでは③の値が高く、-.440*となっており、説明値と状況が多少異なっている。

4.3. 多変量解析による分析

説明値との相関係数が.300以上の項目「一ヶ月に、何さつ（冊）くらい本を読みますか（Ⅰ）」「しょう来（将来）の夢や目標をもっている（Ⅱ）」「学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめている（Ⅲ）」「夜、決まった時間にねる（Ⅳ）」「朝ご飯を毎日食べる（Ⅴ）」「テレビゲームやパソコンなどをする（Ⅵ）」を説明変量、説明値を目的変量として重回帰分析（変数増減法）にかけると次の表1のようなになる（有意でないものは排除する）。

説明値はⅠとかなりの相関、Ⅱ、Ⅲと低い相関が認められる。単相関係数との差も少ないので、各項目同士の相関も低い。Ⅴの項目が外れている。Ⅴを加えて変数の増加をして計算すると、Ⅴの偏相関係数-.036、F値.026となる。先ほどⅤに低い相関が認められたのは、朝食でカロリーを補給する等の栄養学的な問題ではなく、朝食を毎朝取るような生活

習慣や性格が影響していると考えられる。VはⅢとかなりの相関があり.418*となる。

表 1

	I	II	III	IV	VI
偏相関係数	-.559*	.380*	-.331*	-.259*	-.230*
重相関係数 (R) .829** 寄与率 (R ²) .687					

*は p<.05 **は p<.01 で統計的に有意

今回のアンケート項目から、読書量が多く、現実を見て生活習慣が安定している話者の日本語力が高いことがわかる。

県テストとの相関係数が.30以上の項目「一ヶ月に、何さつ(冊)くらい本を読みますか(I)」「しょう来(将来)の夢や目標をもっている(II)」「自分には、よいところがあると思う(VII)」「とき方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法で考える(VIII)」「遊んでいるときや買い物に行ったときなど、ふだんの生活の中で計算をする必要があるときは、暗算をすることがある(IX)」「そのままにしておく(X)」を説明変量、県テストを目的変量として重回帰分析(変数増減法)にかけると次のようになる(有意でないものは排除する)。

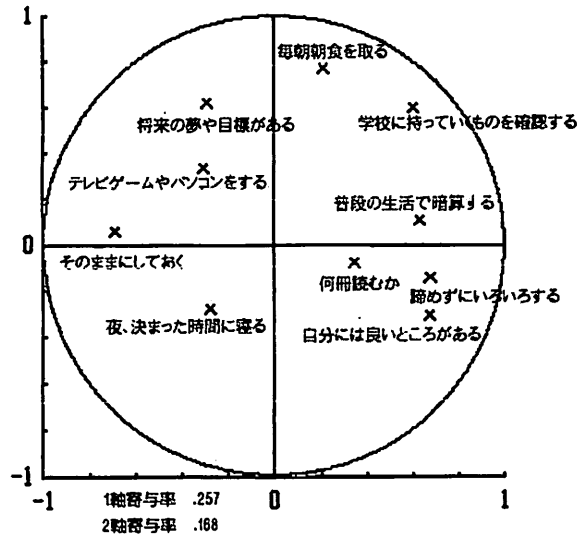
表 2

	I	II	VIII	IX	X
偏相関係数	-.498**	.335**	-.328*	-.297*	.445**
重相関係数 (R) .796** 寄与率 (R ²) .633					

*は p<.05 **は p<.01 で統計的に有意

県テストはI、Xとかなりの相関があり、II、VIIIと低い相関がある。VIII、IX、Xは真面目で几帳面な性格を反映した項目と思われる。説明値と共通しているのはIとIIである。説明値と有効な説明変量はやや異なるが、読書量が多く、現実を見て几帳面な性格の児童の学力が高い傾向があることがわかる。

I から X までの項目を主成分分析にかけると図 2 のようになる。主成分分析 (Principal Component Analysis) とは、多くの変数の値をできるだけ情報の損失なしに、小数個 (m 個) の総合的指標で代表させる方法である。第一主成分はもっともマイナスの値が大きいのが「そのまましておく」、プラスの値が大きいのは「諦めずにいろいろする」なので、積極性に関する主成分と解釈される。V は III と近い位置にあることが、図 2 からわかる。



5. おわりに

今回、県テストに付随して行われた「学習や生活についてのアンケート」と、日本語力 (説明値) および学力 (県テストの結果) の関係について分析した。今回使用した質問項目でもっとも有効であったのは、読書量に関する項目で、日本語力、学力ともかなりの相関が認められた。将来の夢や目標を持っていると語る児童は、日本語力、学力ともに低い傾向にある。この項目は、自分の現状を捉えられているか否かの項目で、現状を捉えられていない児童の日本語力および学力が低いものと考えられる。早野・田中他 (2009) では「日本語力の高い話者は、適切な説明をできる場合に「わかる」と判断しているが、日本語力の低い話者は説明できなくても「わかる」と判定している」(p.48) と論じているが、それと同じ要因であると考えられる。

その他では、几帳面な性格や生活習慣に関する項目で低い相関が認められた。有効な項目は日本語力と学力で違いが見られたが、基本的に読書量が多く、自分の現状を正確に捉えて、生活習慣が安定していて真面目な性格の児童が日本語力、学力ともに高い傾向にあることが確認できた。

FJB は日本で生まれ育っているが日本人と日本語習得の状況が大きく異なる (早野・田中他 2009 等)。過去に調査した FJB と日本人の差は、保護者の母語だけでなく、生活環境の違いが大きく影響していると考えられる。今後は FJB および JSL の状況も調査し、日

本語能力だけでなく、生活環境を含めた言語習得の要因を分析していきたいと考えている。

【注】

- 1 早野慎吾・松井洋子を中心とする研究グループで、2005年度から継続的に調査および研究発表を行っている。
- 2 この28名は、宮崎県某小学校の1クラス全員である。成績の高い児童から低い児童までいる。たとえば、「教研式学力検査NRTテスト4年用」では平均偏差値21～63までおり、ランダムに近い状態である。
- 3 調査項目に関しては早野・松井他(2008b)で詳しく説明した。語彙の性質に関しては早野・田中他(2009)、早野・松井・宮田(2010)で論じている。
なお、理解度調査には「海峡／産地／につこうきすげ／国土／民家／日本三景／エコツアー／うずしお／山深い／登録／貴重／様子／泉／伝統的／収穫／クリーン活動／電子メール／北国／世界遺産／ベスト100／田植え／特ちょう／自然／歴史／周辺／南の島／農業／冷とう／真冬／未来／くふう／四季／建物／イベント／巨大／場所／春／宝物／マイナス20℃／0℃以下／努力」の41語を用いた。
- 4 学力に関するデータは「平成22年度みやざき小学校学力調査(小学校第5年生)」で国語・社会・算数・理科および意識調査が行われている。宮崎県全体の5年生に対して行われたもので、クラス平均・学校平均・県平均等が出されている。以降、県テストと表現する。
- 5 「説明できない」を0点、「辞書的な説明ではないが、だいたい意味を理解できている」を1点、「辞書的な説明ができていない」を2点として数量化した。判定に関しては、松井洋子がすべて行っており、判定者による差はない。
- 6 本稿では、県テストの総合点を使用した。各教科別に分析すれば、早野・宮田(2011)のようにやや違った結果が観察できると思われる。

【参考文献】

- 井上佳代・早野慎吾(2006)「外国人児童生徒に対する教育支援の現状－宮崎地区の調査から－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』14
- 佐藤和之・早野慎吾(2007)「マイノリティ言語話者への教育支援－JSL児童生徒多人数地域での取り組み－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』17
- 白鳥智美・玉井裕子・小澤容子・樋口万喜子(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査－社会科教科書の語彙－」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』

- 早野慎吾・松井洋子・小田原恵美子・宮田好恵・佐藤和之・田中利砂子(2008a)「多言語社会における言語教育」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』19
- 早野慎吾・松井洋子・田中利砂子(2008b)「外国人児童生徒の教科書理解度に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 早野慎吾・田中利砂子・宮田好恵・松井洋子・川添桃・小田原恵美子・田村京子(2009)「外国人児童生徒の文章語理解について－ことばの意味が「わかる」ということ－」『日本語学会2009年度春季大会予稿集』
- 早野慎吾・松井洋子・宮田好恵(2010)「外国人児童の語彙理解に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』17 日本中部言語学会
- 早野慎吾・宮田好恵(2011)「年少者の言語能力と学力の関係－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』18 日本中部言語学会
- 松井洋子・早野慎吾(2006)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究－宮崎地区の現状と課題－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』15
- 松井洋子・早野慎吾(2007a)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究(2)－保護者と家庭環境の調査から－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』16
- 松井洋子・早野慎吾(2007b)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究(3)－コミュニティにおけるJSL日本語支援モデル構築－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』17
- 宮田好恵・松井洋子・早野慎吾(2017)「年少者の言語能力と学力に関する数量的研究－多変量解析を用いて－」第一回立川言語文化研究会研究発表会原稿

(付記)

本稿は、立川言語文化研究会・第一回研究発表会で発表したものに加筆修正したものである。なお、本研究で行った統計処理はすべて早野慎吾作成の多変量解析ソフト HaMAS を使用した。本研究においては、日本語力の数量化と分析は松井が行い、執筆は宮田が行った。早野は全体を統括した。

(2017年12月29日改稿受理)

The Study on the Relationship between Student's Scholastic Ability and Linguistic Ability
 — Linguistic Ability · Awareness · Life Habit —

Yoshie MIYATA Yoko MATSUI Shingo HAYANO